

## 収蔵展「浜松の幅広い文芸人たちⅡ」から

現在開催している「浜松の幅広い文芸人たちⅡ」では、展示品の中になるべく自筆原稿を入れるように心がけました。その人その人の字体からも何となく人柄がうかがえる気がします。また、作者の思想が明確に表れる随筆の類も展示しました。じっくり読むとなかなか味わい深いものです。ここでは清水実の随筆を一つ御紹介します。

## 「流行歌の主題」

流行歌がレコードの形式をとって、もう二十五・六年になる。私はそれらの流行歌を集成して流行歌全集を三巻まで編輯したが、その主題たるや、千遍一律の堂々巡りに驚く。

勿論、その作家の一人に私も加っているのであるが、殊に最近は愈々、温故知新ならぬ懐古への傾向をたどりつあるのに、目を見張らさずにはいられない。

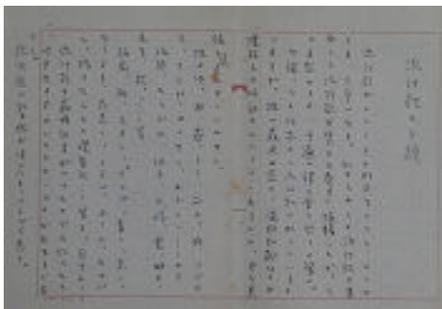
波止場、雨、霧、ドラ、別れ、鷗、マドロス、テープ、せつない、わびしい……から

旅路、たそがれ、他国、山、峠、雲、明日、馬車、鈴、……等  
銀座、柳、ネオン、ステップ、青い、赤い、むらさき、花売り、リズム、ホール、キャバレ、橋のたもとの喫茶店……等々、ETC……

流行歌の歳時記まがいのものでも作ったら、吹き出さずにはいられないものが出来るであろう。

流行歌に智性がほしいと、つくづく思う。

〈漢字・送りがな等原文のまま〉



## 文芸館の四季

まだ暑さが残るある日、よく私に草花のことを教えてくれる俳句の先生が、窓の外から手招きして呼ぶのでそばまで行ってみました。先生が指で示す植え込みの奥に目をやると、大きさは1センチ程度で、お尻のところはピンクに色づいている可愛い実が無数に成っていました。「イヌビワ」だと教えてくれました。

早速植物図鑑で調べてみると、そこの写真には茶褐色をした実が紹介されていました。私の撮った写真(右)はまだ若い時期の実だったようです。どうせなら十分熟れるまで待って、図鑑のような茶褐色になった頃もう一度撮り直し、それを皆さんに紹介しようと思いにしていました。かなり日が経って、もう十分熟れただろうとカメラを持ってその場所へ行ってみると、何とあれだけ沢山成っていた実がほんの疎らにしか見つけられないのです。

狐につままれたような気持ちで前述の先生に話すと、「鳥も好物のようですから……」と一言。

自分の間抜けさに呆れ果てると同時に、私より遙かに頃合ころあいというものを理解している鳥たちに、心底脱帽しました。

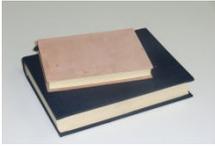


## お知らせ

○本年度もこれから募集する講座が残りわずかとなってきました。今後募集する講座(現在募集中も含む)を御紹介します。

- ・「切り絵教室」…受付9月15日(土)～10月27日(土) 定員20人
- ・「遠州森町を訪ねて」…受付10月15日(月)～11月10日(土) 定員30人
- ・「文章教室Ⅲ」…受付10月15日(月)～11月28日(水) 定員20人

いずれも往復はがきでお申し込み下さい。



## 浜松文学紀行 13

### 肴町 亀鶴山大安寺 佐伯泰英「秘剣雪割り」

1999年、「密命一見参 寒月霞斬り」によって「文庫書き下ろし時代小説」の世界に登場した佐伯泰英は、その後「影二郎始末旅」、「吉原裏同心」、「悪松」、「居眠り磐音江戸双紙」、「鎌倉河岸捕り物控」、「酔いどれ小籐次留書」、「古着屋総兵衛影始末」、「交代寄合伊那衆異聞」などの人気シリーズを矢継ぎ早に発表、累計1千万部の大ベストセラー作家になった。「居眠り磐音」と「鎌倉河岸」がNHKで放映されたのが売れ行きに一層の拍車をかけた。体調を崩して以来ややペースが落ちたとは言え、今も驚異的なスピードで新作を書き続けている。このうちの「悪松」シリーズは、5作で中断しているが第1章は浜松が舞台になっている。

一松が浜松に現われたのは旧暦八月のこと、天竜川の土手の芒の穂が夕暮れの光に茜色に染まっていた。(略)一松がその門前に捨てられていたという古刹は、手入れを忘れられて久しいことを示している。山門も朽ちかけていた。

見習い中間だった一松は、父伍平をなぶり殺しにした中間頭たちを叩きのめし、江戸払いとなった。そこで、門前の捨て子と父から度々聞かされてきた寺を探しに浜松にやって来た。壊れかけた山門を見上げると、「大安寺」という文字が目に入った。字は読めなかったが、侍になりたかった一松は、その字を見て「大安寺一松」と名のることにした。

子供の頃から首に下げていたお守りの中の紙切れに書かれている「はままつやど えんしゅうや たき」を手掛かりに泊まった遠州屋で、一松が生まれた後伍平が逃亡の途次天竜川で溺れ死んだたきを捨てて一松とともに江戸に来たこと、母たきの亡骸は遠州屋の主人が大安寺の無縁墓に葬ったことなどを知らされたのである。

浜松を後に江戸への帰路、箱根山中で元薩摩藩士の示現流の使い手愛甲喜平太に出会い、厳しい指導を受ける。半年後老人はなくなったが、一松は一人修行を続け、奥義「秘剣雪割り」を完成させた。示現流を使い道場破りを続ける一松に、薩摩藩江戸屋敷の面々が一松討伐に立ち上がる。第2巻「秘剣瀑流返し」、第3巻「秘剣乱舞」と薩摩藩との戦いが繰り広げられる。第4巻からは水戸光圀の知遇を得て、物語はさらに新たな展開を見せる。

一松は善人ではない。悪松と称されるように破天荒な阿修羅のごとく猛々しき男である。身長6尺3寸(約190cm)。その大男が武器を大上段に振りかぶったまま、人間の動きをはるかに超えた跳躍から一気に、ものすごい速度で相手の脳天に振り下ろす。敵は武器が届く前に脳震盪を起こしてしまう、そこへ剣や木刀が落ちてくるのである。まさに一撃必殺の豪剣である。

